

【史料整理】

天災と人災を考える

——在村の災害伝承と災害碑文——

杉 仁

はじめに

天災と人災 二〇一一年三月一日一四時四六分一八秒、巨大な天災と人災が起こった。まずは天災としての東日本大震災。**M 9・0**の巨大地震とくに巨大津波のTV映像に、大きな衝撃をうけた。

その直後、福島第一原発で外部電源の鉄塔が倒れて大停電、津波の高さを甘くみていてため津波に襲われ、地下の予備電源機もこわれた。外部電源の停止も、予備電源の停止も、想定していなかったという。

冷却水を循環できぬままウラン燃料が熔け落ち、原子

炉の底で塊になるという最悪のメルトダウン状態となり、「危険レベル7」の認定で世界に恥をさらした。記者会見では、すべてを「想定外」とする言い訳が連発された。

貞観津波の警告 「津波の高さを甘くみた」とは、東北地方の海底でほぼ三〇〇年単位で起こる巨大地震の歴史記録を、無視したことにはじまる。とくに貞観十一年五月二十六日（八六九年陽暦七月十三日）の巨大地震「貞観地震」の記録である。

多賀城の城下、本城への登り口は、海岸から三キ弱の標高六く七尺地点。まず地震で「城郭倉庫。門櫓牆壁。頽落顛覆。其数知ラズ」となり、津波で「原野道路、惣

テ滄溟ト爲ル。…溺死スル者千許リ、資産苗稼、殆ド子遺無し」(『日本三』^{【代実録】})と記録された。津波高およそ一〇余呎の被害記録である。

ここ十年ほどの土砂層調査では、ほぼ三〇〇年おきに津波砂層がみつかり、とくに三〇〇年前頃からほぼ一〇〇〇年置きにみられる三つの厚い津波砂層は、一〇余呎の貞観津波級の巨大津波が、三回あったことを裏付けているという。

なぜ福島第一だけ 多賀城の記録は、ゆるく湾曲した仙台湾にひろがる平野でのことだが、福島原発は、ほぼ直線状海岸の標高八〜一〇呎の台地にある。津波高の予想は、六呎だったという。原子炉は地下岩盤まで掘って建造したとすれば、最低部は海面下になるわけで、貞観津波一〇呎級に襲われて水没すれば、地下室の予備電源が失われるのは目に見えている。

事故直後に感じたことは、なぜ福島第一だけなのか…、なぜ福島第二や女川原発は緊急停止後も安全状態をたもっているのか…である。なにか福島第一だけの欠陥があるのではないかと直観したが、あとの報道が、最初の原発で米国GE社の設計と技術を丸飲みし、巨大津波は想定

しなかった結果だ、とつたえた。

それにしても、保安院もマスコミも、なぜ福島第二や女川が緊急停止後も安全状態をたもっているのか…、福島第一とどうちがうのか…、一言もふれない。

いずれにせよ今回の事態は、専門家が警告する津波高一〇余呎の科学的な調査結果を無視した「巨大人災」にほかならない。電源喪失で冷却水が止まってウラン燃料がメルトダウン、発生した大量の水素の爆発で覆屋は吹き飛び、大量の放射能をまき散らした。そのまま五ヶ月たっても、基本的な「冷却水循環」さえ解決の用途は、完全にはついていない。

基本的人権の侵害 周辺地域は大量の飛散放射能におおわれ、「計画的避難」と称する「強制退去命令」で、役場ごと住民は二〇キ圏外に追放された。日本国憲法の基本的人権「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」(二五条一項)の生存権を犯す巨大犯罪といえる。土地私有、家屋私有、財産私有など、国民の基本的な私有権も犯している。

江戸期でさえ、江戸払いや十里四方追放は、裁きによる犯罪人に限られていた。おそらく有史以来、人災によ

って住民が生活する普通の地域から強制排除されることはなかったはずである。今回の人災は（谷中村強制廃村もふめ）、歴史・上未曾有の巨大犯罪といえよう。この人災が、「史料」としてどう遺され、どう現実社会に生かされていくか。歴史にたずさわるものにとつても、大きな課題であらう。

史料としての「伝承」 歴史の基本となる「史料」の一つに、「口承」「伝承」がある。歴史上ある体験に遭遇した体験者が、語るべき価値ある体験として語り部となり、聞いた人がさらに価値を感じて伝承者としてより多くの人に語りつぎ、連鎖的に伝承網をなしてひろがる。伝承の価値を重んじ、何らか実行にうつす実践者もあらわれる。

価値の表現が「文化」だとすれば、災害伝承は一大文化現象である。体験者ゝ語り部ゝ伝承者ゝ伝承網者にひろがり、実践者によって現実社会に活かされれば、一時代の一文化に画期をもたらす。

「昔ここに寺院があつた…」との伝承地で、廃寺址が発見される事例は多い。歴史伝承は、意外な正確さをもっているのである。体験者、語り部、伝承者、伝承網者、実践者、いずれも歴史の主体として、一定の役割をはた

してきたのである。

歴史伝承としての波分信仰

前回とりあげた「波分神社」あるいは「波分不動」も、そうした歴史伝承の一つである。口頭だけでなく、寺社という目に見える、信仰上の形で伝承してきた。



さきにとりあげた仙台市若林区霞目「波分神社」も、天保津波の止まった場所との「伝承」をもつといわれる。公開された周辺の津波分布図は、近隣をよく知る人びとの解説付き引用でひろがる。あらたな「伝承」の再生産である。上の地図が、その一つである。

あきらかに平成津波は、海岸から「五

・五^キ」、霞目「波分神社」のある微高地の標高線をとりますく形で、見事に止まっている。貞観津波の伝承のもつ正確さを証する事例である。

また前回の投稿後、会員の小田眞弘氏から、千葉県旭市飯岡でみかけた古い小祠「波切不動尊」の画像をいただいた。碑陰刻字によれば、近隣の岬の浸食激しい岩壁の波分地点に祀られたものを、玉崎神社ちかくに移したものだという。謝意を呈するとともに、いただいた写真を紹介しておく。

歴史伝承の可視化「海嘯碑」 おなじく目に見える石碑という、堅牢な形でのこす事例も多い。関ヶ原や小牧長



久手のような大合戦の跡地にも、大勢の死者が出たと伝承される地点に、首塚・胴塚・切腹塚や鎮魂碑

が在村で建立され、さらに後世に伝えられる。義民塚も全国に多い。噴火や洪水、地震や津波、大火や疫病など、死者を弔う災害碑も、全国各地にのこる。

前稿でも述べたが、筆者は「在村災害史」なる範疇を立て、気づくたびに史料をたくわえてきた。今回の大地震と大津波は、貞観地震・貞観津波にならって「平成地震」「平成津波」と仮称し、これまで得た史料を整理しながら、津波災害の「伝承」と「石碑」を、在村災害史の史料として見直す手がかりを得たい。

I 普代村と太田名部漁港を守った

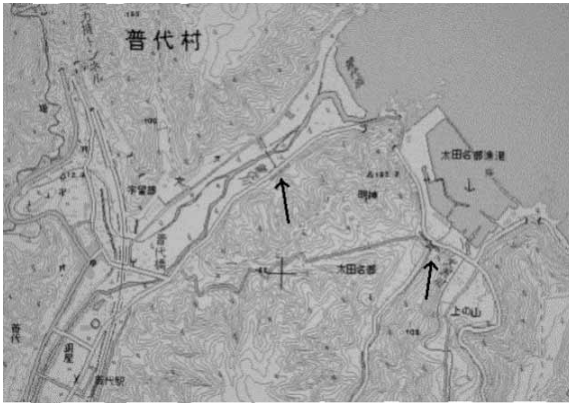
在村の伝承と実践

明治の教訓「一五^ハ津波」 こんな新聞記事があった。

「明治の教訓、一五^ハm堤防・水門が村守る…」として、岩手県下閉伊郡太田名部村（いま普代村）は「一五・五m堤防」（1967年、県予算5800万円で完成）のおかげで「村内での死者数はゼロ」と報道された。

同村は、一八九六明治二十九年の明治三陸津波につづき、一九三三昭和八年の昭和三陸津波で計四三九人の犠牲を

出した。「明治に一五メートルの波が来た……」という言い伝えが頭から離れなかった防潮堤建設時^(『96年代』)の村長「和村幸得」氏^(故人)は、「二、五^{メートル}以上」をつよく主張した。すでに一部が完成して一九六〇年のチリ地震津波を防いだ田老村の一〇m防潮堤を大きく上回る計画だとして、批判もつよかったという。



しかしその田老村の防潮堤は、今回の津波で崩れ、田老地区の死者は二〇人におよんでいる。避難した人たちは「防潮堤があるので油断があった」と話している、とも報じられた^(2011.3.17 産経新聞)。

太田名部漁港をふくむ普代村は、昆布やワカメの養殖を主

産業とする漁村で、人口約三〇〇〇人は県内の自治体では最少だという。海には近いが、せまい普代・太田名部の両地区に約一五〇〇人が暮らす。

一五^{メートル}防潮堤の威力 漁港関係者約一〇〇人とともに堤防上に避難した太田定治さん^(飲食店経営 63才)は、「ほどなく巨大な波が港のすべてをのみ込んだが防潮堤で食い止められ、足もとがぬれることもなかった」として、「これがなかったら、みんなの命もなかった」と語ったという。

国土地理院の地図をみよう。南西側の太田名部漁港は、二重の外堤防に守られている。海沿いの平地には、漁業協同組合など漁業関係の建物がみえるが、漁船や養殖施設などもふくめ、「壊滅的な被害」^(村広報 村長声明)をうけたという。たしかに堤防外側の漁協の大建物は、外観はのこつても、周辺はがれきでおおわれている^(村公開の写真)。別表の津波実測高では、太田名部八・四〜一〇・六^{メートル}であった。

海側に向かってゆるくカーブする自動車道路に沿って堤防と水門がみえるが、水門は地震直後に遠隔操作ですぐ閉じられたのであろう。地図では、堤防内側の自動車道路下、標高一〇^{メートル}から四〇〜五〇^{メートル}前後にかけて民家がひろがるが、津波被害をまったくうけなかったという

のである（以上、右矢印）。

防潮堤内は標高一〇㍎が安全ライン 地図の北西隣の譜代浜にも、海辺ちかくに漁業建物が見えるが、譜代川のほぼ四〇〇㍎地点の防潮堤（左矢印）の上下は、防潮林らしく、針葉樹と広葉樹がほぼ一^キ余にひろがる。その上の譜代橋あたりは、鉄道土手と河川土手が入り組んでいる。さらにその上の平地に、譜代駅と村役場および民家と水田がひろがる。神社や寺院、墓地や碑文は標高一〇㍎強、駅や村役場や小中学校はほぼ標高一〇㍎。安全ラインは、標高一〇㍎であつた。

地震直後、この防潮堤（左矢印）の水門閉鎖<sup>（遠隔操作故障中）
（だつたという）</sup>のため消防車で急行した久慈消防署普代分署副分署長の立白勝氏が、こう語つたと報道された。

「機械室に駆け上がって手動スイッチに切り替えると鉄製ゲートが動き、ほっと一息ついた。消防車に乗って避難しようとしたとき、背後から「バキ、バキッ」と異様な音をするのに気付いた。普代川を逆流してきた津波が黒い塊になって防潮林をなぎ倒し、水門に押し寄せてくる音だった。アクセルを踏み込み、かろうじて難を逃れた。津波は高さ二〇㍎を超

えていたが、水門に激突して乗り越えたが、勢いはそがれた。水門から普代川上流にさかのぼってほどなく止まり、近くの小学校や集落には浸水被害はなかった。…“高い水門をつくってくれた和村、さん”<sup>（前掲
和村氏）</sup>のおかげ”と話した…。^{（産経新聞2011.4.26）}

水門堤防をこえるほどの勢いも、一^キ余におよぶ防潮林ですでに弱められていたのであろう。水門堤防と防潮林で二重三重に守られていたのである。地図だけでも、用意周到な措置がとられていた事実が読みとれる。

これら普代村と太田名部漁港を救つたのは、「明治津波：一五㍎」の伝承と伝承者、および、これを忠実に守り、防潮堤「一五・五㍎」築造を実現させた実践者たちだったのである。防潮林の提案者も、譜代川の大堤防水門の閉鎖作業に走った副分署長も、すべて実践者といえる。こうした防災伝承を、だれもが目で見える「石碑」の形でのかす地域も多い。犠牲者の供養と、後世への警告をかねた石碑、津波碑、ひろく海嘯碑である。碑の発案者や、建立にかかわった人びとも、伝承の実践者といえる。

II 姉吉村の海嘯碑

——「この下に家を建てるな」——

此処より下に家を建てるな碑 こんな海嘯碑の報道があった。

「此処より下に家を建てるな」。

東日本巨大地震で沿岸部が津波にのみこまれた岩手県宮古市にあつて、重茂半島東端の姉吉地区(一二世帯約四〇人)では全ての家屋が被害を免れた。一九三三年の昭和三陸大津波の後、海拔約六〇メートルの場所に建てられた石碑の警告を守り、坂の上で暮らしてきた住民たちは、改めて先人の教えに感謝していた。

「高き住居は児孫の和樂 想へ 惨禍の大津浪」
本州最東端の鉾ヶ埼灯台^{とどがさき}から南西約二キロ、姉吉漁港から延びる急坂に立つ石碑に刻まれた言葉だ。
結びで「此処より…」と戒めている。

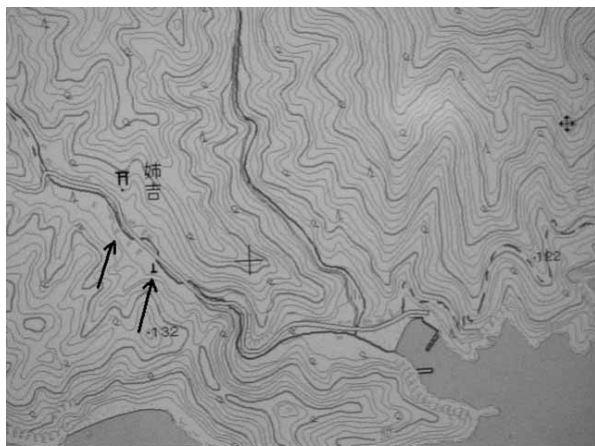
地区は一八九六年の明治、一九三三年の昭和と二度の三陸大津波に襲われ、生存者がそれぞれ二人と四人という壊滅的な被害を受けた。昭和六十四年の直

後、住民らが石碑を建立。その後は全ての住民が石碑より高い場所で暮らすようになった。

地震の起きた一日、港にいた住民たちは大津波警報が発令されると、高台にある家を目指して、曲がりくねった約八〇〇メートルの坂道を駆け上がった。巨大な波が濁流となり、漁船もろとも押し寄せてきたが、その勢いは石碑の約五〇メートル手前で止まった。地区自治会長の木村民茂さん(65)が「幼いころから『石碑の教えを破るな』と言い聞かされてきた。先人の教訓のおかげで集落は生き残った」と話す(2012年2月30日読売新聞。写真は次述の群馬大学²から切抜き加工)。

前稿でもふれたが、とくに最近、中国語・英語なども外国新聞もふくめ、「Aneyoshi」の新聞記事がふえている。





国際的にも、海嘯碑への関心は高いが、姉吉村の平成津波の遡上実測値は、二二・六〇二六・四と公表されている。国土地理院1/25000をみよう。

防波堤二本にかこまれた姉吉漁港の砂浜沿いの道に沿って、漁業設備の建物

六棟がみえる。曲がりくねった登り道八〇〇段ほどを登った地点、六〇段等高線のすぐ下に、石碑マークがみえる（右矢印）。「此処より下に家を建てるな」の海嘯碑である。民家は、そこから上の道沿いに一〇棟がみえる（左矢印）。文字とおり、「此処より下に家を建てるな碑」の

警告を、厳守していることがわかる。

写真は読みにくいのが、最上段が横書きで「大津波記念碑」、中段第二行目が「高き住居は」、末尾二行が「此処より下に／家を建てるな」がみえる。下段第一行「明治廿九年…」以外はよく見えないが、「明治廿九年にも、昭和八年にも津波は此処まで来て部落は全滅し、生存者僅かに前に二人後ろに四人のみ、幾歳経るとも要心あれ」だという。石碑の位置、標高五〇段強まで遡上したことになるが、平成津波では「姉吉 二二・六〇二六・四」だったという（次巻東北大三）。

こうした三陸の海嘯碑、全データは群馬大学が、津波遡上データは東京大学が、それぞれ公開している。あわせみながら、津波にかかわる伝承と実践のようすを整理したい。

Ⅲ 三陸の海嘯碑データと

平成の津波遡上データ

三陸の海嘯碑データ 三陸海岸は、明治津波、昭和初期津波、そして昭和後期チリ地震津波で大きな被害をうけ

た。三陸地方にのこる海嘯碑データは、群馬大学が公開する①「群馬大海嘯碑一覧」(^{称 仮})には写真も付いている。No.一〇五五(^{ネット上でみつからず})をのぞく全二一七点のデータ一覧が、確認できた<http://tsunami.media.gunma-u.ac.jp/Tsunami/JAVASCRIPT/iwate/>。

ほか徳島県防災課「安心とくしま」が、南海地震と東南海地震の同時発生も視野に入れながらさまざまなデータを公開、「徳島県地震・津波碑」全37回の連載も終えている。別考に価する。<http://anshin.pref.tokushima.jp/normal/earthquake/index.html>

平成大津波の遡上データは、東北大学が公開する、②「東京大 平成津波遡上データ」(^{称 仮})は、確認地点は①より大幅に少ないが、貴重なデータである<http://outreach.eri.u-tokyo.ac.jp/eqvolc/201103_tohoku/tsunami/>。①の原本項目は、「No.番号・所在地・対象・碑銘・事項・建造年月、標語・遭難者名・被害状況・恩賜義捐・施主・その他・規模・備考・碑文(^{すべし})」となっているが、ここでの引用は、主要部「No.建造年月」まででとどめた。「対象」は碑が対象とした津波年代、「碑銘」は表の刻字、「事項」は碑の建立事情や警告内容を略記する。

筆者はこれを一点つつ、国土地理院1/25000地図と照合し、地図マークがしめす範囲で、碑の位置、民家の分布、学校や寺院・神社の位置などをたしかめた。これに、②「東北大 津波遡上データ」と合致する地点の遡上標高をあわせ、「所在地」の次項に「対…」として補筆した。これを「別表：群馬大三陸海嘯碑一覧対補筆版」と仮称し、別表①として添付する。

学校・寺院・神社を重視したのは、ともに津波の記憶と伝承が生かされる可能性がきわめ高いと考えたからである。さきの波分神社く波分不動の調べでも、海岸べりの神社たるもの、ほとんどが標高二〇く五〇以上位置する。文字史料はないにしても、津波の被害をうけない場所として、古くから伝承されてきた地点であろう。

明治以降の学校にも引きつがれたと考えられるが、今回の津波は、各地で小学校に大きな被害をあたえた。標高や被害状況を、直線状海岸とラップ状海岸にわけてみよう。

直線状海岸での学校被害 直線状海岸でたとえば、仙台市若林区の東六郷く沖野く上飯田く荒浜地区などの小学校は、水田地帯の標高二・五く五・〇に地点にある。

荒浜小学校は、直線状海岸からほぼ六〇〇^尺。砂丘を下った標高一・五^尺地域にあるが、四階建て校舎の二階（^{およそ}六^尺か）まで水没、体育館および校庭に駐車中の車は被害甚大だったが、避難民を校舎の上階に上げたため、人命被害は皆無だったという。

東六郷小学校は、直線状海岸からほぼ二^キ。標高二・六^尺三角点の近くだが、体育館に避難した住民が消防の指示で校舎の上階へ移動する途中で津波に襲われた。最後尾の町内会長は、「胸まで水につかりながら、住民を校舎に上げた。津波は想定外。ぎりぎりです全員無事だった」と語った、と報道された。

いずれも、大被害で閉鎖された仙台空港の滑走路の標高二^尺地点にちかい。創立は荒浜小学校・東六郷小学校ともに明治六年で、津波被害を避けられる標高ではないが、津波は高いところに上がれ…との「伝承」が守られ、人命被害はなかったことになる。

いずれにせ、ほぼ直線状海岸の巨大津波では、学校校舎三階以上のおよそ六く七^尺、平地では標高五^尺線より上が、ギリギリの安全ラインといえる。

ラッパ状海岸での学校被害 三陸のラッパ状海岸では、

当然ながら、それ以上の高さで遡上する。別表でも、二〇く二〇数^尺、あるいは二〇数^尺く三〇数^尺の遡上記録が目立つ。

さきの姉吉村には小学校はないが、隣のゆるい枕状にひらけた千^ち鷄^{けい}村では、遡上データは「二九・四く三一・一^尺」、標高三〇^尺弱の千鷄小学校の校庭まで達したという。細長い宮古湾の奥で標高二〇^尺の高台にある高浜小学校も、校庭が津波に襲われたという（^{宮古市報告}遡上データなし）。

素人でもわかることだが、湾や入り江など海岸の形によつて津波の高さは、大きく異なる。在村では経験済みでありを、実践済みであった。さきの例でいえば、ゆるやかに開いた海岸線の譜代村く太田名部漁港の安全ラインは、高さ一五^尺。せまい三角形の頂点にあたる姉吉漁港では、標高五〇^尺弱が安全ラインとされ、これを厳守し実践してきたのである。

国交省の失政 ところが、おどろいたことに国交省は、ようやく今年六月二七日、「防潮堤の高さ基準」を「湾や入り江など海岸ごとに調査して決めていく方針を決めた」と報道された。これまでは、どうしていたのか。「海岸保全基本計画」なるものにより、一定の広域ごとに津波高

を想定していたという。

岩手県北部は明治三陸地震津波を基準に、同県南部と宮城県はチリ地震津波を基準に、それぞれ広域ごとに一律に規定してきたというのは、地形を無視した、まことに大ざっぱな規定である。

ようやくここに至って、在村の知恵並に、湾や入り江など海岸の形ごとに決めていく方針になったというのだから、中央官庁なるものが、いかにつよく固定観念に固執し、国民の実生活を守ってこなかったか、とくに歴史の教訓をいかに無視してきたかが、よくわかる。

おわりに

以下、津波伝承が在村でどのように現実になかされていくのか、確める基礎データとして、さきの「別表・群馬大三陸海嘯碑一覧」^{対補筆版}を添付する。各データの全貌は、下記の①「群馬大海嘯碑一覧」、②「東京大津波遡上データ」で確かめていただきたい。

① http://tsunami.media.gunma-u.ac.jp/TSUNAMI/JAVA_SCRIPT/iwate/

② <http://outreach.eri.u-tokyo.ac.jp/eqvolc/201103-tohoku/tsunami/>

今回も、新聞の報道、ネット上の諸データ、国土地理院の地図、日本歴史地名大系^{（版）}による整理で、現地調査はできていない。「研究ノート」にも「史料紹介」にもなりえず、「史料整理」にとどめた。歴史従事者として、何かをせざるを得ない焦燥感にかられての作業にとどまる。

大震災から五ヶ月をこえた。とり急ぎまとめ、「書物・出版と社会変容」研究会へ投稿しておく。文章の吟味も不十分だが、中間報告としてご覧たまわれれば幸甚である。

①<<http://tsunami.media.gunma-u.ac.jp/TSUNAMI/JAVASCRIPT/iwate/>>
群馬大学DT表に第三項[ｽｷ`]で民家等の標高と平成津波の遡上標高を加筆

NO	番号	所在地	[ｽｷ`補筆/小数字は標高、大数字は平成津波の遡上標高/小=小学校]	対象年 n=明治 s=昭和	碑銘	備考と伝承	建造年月
56	宮古1	宮古市佐明根	[ｽｷ`天保飢饉餓死者菩提の天保10年建立餓死者供養塔7リ]	m29	海嘯遭難横死供養	個人供養碑	
57	宮古2	宮古市女道戸	[ｽｷ`標高30m碑7リ、民家10m線以上。]	m29	海嘯記念	女道戸オッパ`部落流失19戸、溺死者63人、23回忌	s7
58	宮古3	宮古市日出島	[ｽｷ`標高60mに碑あり 民家は10～20m以上。]	m29	海嘯溺死者供養塔		
59	宮古4	宮古市日出島	[ｽｷ`標高60mに碑あり 民家は10～20m以上。]	m29	牛馬供養塔		
60	宮古5	宮古市大沢	[ｽｷ`神社30m民家10～20m以上]	s8	海嘯記念碑	大地震の後は津波が来る、地震があつたら、此处へ集れ；被害1戸	s8, 12月
61	宮古6	宮古市蛸の浜心公院	[ｽｷ`神社・寺院・碑6基以上30～40m]	m29	海嘯記念碑	鎌が崎町177戸流失、死者128人、幻灯会出席者助命す	m41, 11月
62	宮古7	宮古市		s8	祀海嘯供養塔	三周年	s10, 2月
63	宮古8	宮古市蛸の浜心公院	[ｽｷ`神社・寺院・碑6基以上30～40m]	s8	津浪襲来記録標	波高13M、惨害流亡家屋277戸、死者28人	s12, 6月
64	宮古9	宮古市蛸の浜心公院	[ｽｷ`神社・寺院・碑6基以上30～40m]	s8	津浪襲来記録標	波高6M、強震後二三十分に於て打寄せる海嘯三十年1度の割に襲うなれと此の自然の防浪堤日和山よくふせぐ吾等が里の守り	s12, 6月
65	宮古10	宮古市浄土ヶ浜		s8	大海嘯記念	大地震の後は津波が来る、大地震があつたら高い所へ集まれ、津波に襲われたら何処でも此の位能高所へ、遠くへ逃げては津波に追付かる、常に逃げ場を用意して置け、家を建てるなら津波の来ぬ安全地帯へ；溺死2人、流失2戸	s9, 3月
66	宮古11	宮古市浄土ヶ浜		s35	記念碑	地震がなくとも潮汐が異常に退いたら津波が来るから早く高い所に避難せよ	s60
67	宮古12	宮古市本町		江戸時代	宮古開港記念碑	開港三百年記、旧領主南部公慶長16年海嘯被害の復興に言及あり	s4, 9月

68	宮古13	宮古市沢田常安寺	〔ｽｷﾞ〕寺院墓地 碑 30～50m 民家5～10m	m29	三陸海嘯横死者招魂之碑	宮城・岩手・青森各県の被害；寺伝によると天正八年（一五八〇）華嚴院六世三叟義門が和見館間（わみたてま）に一字を建立したという。これを古常安寺というが、慶長一六年（一六一一）二世嶽翁嶺鷲のとき閉伊（へい）沿岸を襲った大海嘯で流失。その後横（よこ）町の深山（しんざん）にあった別当永貞坊長福院の屋敷内に小庵を結んで仏事を続けるが、寛永二年（一六二五）三世角無先牛に至って、代官小本助兵衛・黒田（くろた）村肝入内蔵之助らの尽力により現在地に再建された（「小本家記録」小笠原文書）。	m29, 12月
69	宮古14	宮古市田の神1丁目	〔ｽｷﾞ〕傾斜地や上 民家10m	江戸時代	一本柳の跡	言い伝えに拠れば、この場所に柳の大木あり、一本柳と呼んだ江戸時代のヨダ（津波）は宮古にも大被害を与えた、津波により山口川逆流せる波に乗って来たダンベ（舟）を一本柳に繋留したと伝えられている	1989, 6月
70	宮古15	宮古市藤原龍音堂		m29	三陸大海嘯横死精霊	他所で死亡した8名の供養塔	
71	宮古16	宮古市藤原45号線脇	〔ｽｷﾞ〕10m線の下	m29	海嘯記念碑	磯鶏区被害；家屋流失121戸、死者96人	m35, 5月
72	宮古17	宮古市藤原45号線脇		s8	三陸大海嘯記念碑	大地震の後には津浪が来る、地震があったら高い処へ逃げろ；磯鶏村被害逃亡・倒壊40戸全戸、死者2人、負傷者6人	s9, 5月
73	宮古18	宮古市金浜江山寺	〔ｽｷﾞ〕寺10m 碑20m	m29	三陸海嘯横死者精霊		
74	宮古19	宮古市金沢45号線脇		s35	チリ地震津浪記念碑	大地震の後には津浪が来る、外国地震でも津浪は来る、潮がめだつてひいたら高い所へ；宮古市被害状況、被害総額九億余；突如の津浪襲来に常識が覆る	
75	宮古20	宮古市赤前小学校角地	〔ｽｷﾞ〕小学校は40m線上 民家5～30m	m29	海嘯記念碑		
76	宮古21	宮古市重茂白浜	〔ｽｷﾞ〕碑二基 5～6m・20m	m29	海嘯横死者精霊塔	重茂様	
77	宮古22	宮古市重茂笹沢	〔ｽｷﾞ〕碑二基 5～6m・20m	m29	三陸海嘯記念碑	川代、石浜、千鷲、姉吉、元村、音部、荒牧、鷺磯、中組、追切の被害列挙す	t14, 3月

78	宮古23	宮古市重茂鵜磯	〔ｽｷﾞ 神社10～15m 民家50～60m 小学校30m。遡上＝鵜磯小学校 23. 2～27. 0。〕	s8	海嘯記念碑	強い地震は津浪の報せ、その後の警戒一時間、忘るな惨禍の大津波	
79	宮古24	宮古市重茂音部	〔ｽｷﾞ 神社60m 民家10m以下および50～60m以上〕	m29	海嘯記念碑	文学博士井上円了書、	
80	宮古25	宮古市重茂音部	〔ｽｷﾞ 神社60m 民家10m以下および50～60m以上〕	s8	昭和八年大津浪記念碑	強い地震は津浪の報せ、その後よく警戒一時間、想へ惨禍の三月三日	
81	宮古26	宮古市重茂音部	〔ｽｷﾞ 神社60m 民家10m以下および50～60m以上。遡上＝重茂立浜 22. 5～26. 2〕	m29	馬頭観世音		
82	宮古27	宮古市重茂館重茂宿浜	〔ｽｷﾞ 遡上＝ 24. 3～24. 9〕	m29	海嘯供養碑		
83	宮古28	宮古市重茂里(音部里?)	〔ｽｷﾞ 10mに一基、20mに一基〕	s8	津浪記念碑	強い地震は津浪の報せ、その後よく警戒一時間、想へ惨禍の三月三日	
84	宮古29	宮古市重茂里	〔ｽｷﾞ 民家10～30m。重茂里漁港、遡上＝ 19. 9～34. 0。〕	m29	海嘯記念碑	里部落家屋50戸全滅、死亡250人	
85	宮古30	宮古市重茂姉吉	〔ｽｷﾞ 碑60m 民家60m以上 神社80m。遡上＝ 22. 6～26. 4。〕	s8	大津浪記念碑	高き住居は児孫の和楽、想へ惨禍の大津浪、此処より下に家を建てるな；m29にもs8にも浪は此処まで来て部落は全滅した生存者2人、幾歳経るとも用心	
86	宮古31	宮古市重茂姉吉4。	〔ｽｷﾞ 碑50m 民家60m以上 神社80m。遡上＝ 22. 6～26. 〕	m29・s8	観世音菩薩勧請縁起	m29重茂地区死者860人、s8再び、160人余の被害、50回忌にあたり、観音經の一句をもって供養す。	s57, 6月
87	宮古32	宮古市千鶴市道沿	〔ｽｷﾞ 神社50m 弱 小学校 20～30m〕	s8	大津浪記念碑	強い地震は津浪の報せ、その後よく警戒一時間、想へ惨禍の三月三日	
88	宮古33	宮古市千鶴市川沿	〔ｽｷﾞ 神社50m 弱 小学校 20～30m。遡上＝ 29. 4～31. 1。〕	m29	海嘯記念碑	千鶴部落流亡家屋17戸、死亡90人	s3, 5月、s8の朝日義捐にて改

89	宮古34	宮古市千鶴川沿	【ｽｷﾞ 神社50m 弱 小学校 20 ～30m。遡上＝2 9. 4～31. 1。	s8	大津浪記念 碑	強い地震は津浪の報せ、その 後よく警戒一時間、想へ惨禍 の三月三日	
90	宮古35	宮古市石浜	【ｽｷﾞ 神社30m 民家10m以下から 90m	m29	海嘯記念碑		
91	宮古36	宮古市石浜	【ｽｷﾞ 神社30m 民家10m以下から 90m	m29	海嘯横死牛 馬観世音		t 1 2 , 1 1 月
92	宮古37	宮古市川代	【ｽｷﾞ 神社50m 民家10～4～50m	s8	大海嘯記念 碑	大地震の後には津浪が来る、 大地震があったら高い所へ集 まれ、津浪の来る前には海水 がひける、遠くへ逃げては津 浪に追付かる、近くの高い所 を用意して置け、住宅は津浪 浸水線より高い所へ	s 9 , 3 月
93	宮古38	宮古市川代	【ｽｷﾞ 神社50m 民家10～4～50m	m29	大津浪記念 塔	溺死者氏名 1 4 家 5 3 人 姓 名	
106	大槌1	大槌町吉里吉 里吉祥寺	【ｽｷﾞ 寺院70m	s8	海嘯溺死精 霊塔	稲荷丸乗組員遭難者 8 名	
107	大槌2	大槌町吉里吉 里金毘羅社	【ｽｷﾞ 寺院 碑 70m 神社 小中 40m	s8	大海嘯記念 碑	地震があったら津浪の用心せ よ、津浪が来たら高い所へ逃 げよ、危険地帯に居住する な；大槌町流失・倒壊 6 2 2 戸、溺死61人、耕地浸水 6 7 町歩	s 9 , 3 月
108	大槌3	大槌町吉里吉 里塚鼻神社前 神社 40m		m29	海嘯溺死精 霊塔		m 3 0 , 5 月
109	大槌4	大槌町赤浜	【ｽｷﾞ 神社30 小20m	s8	大海嘯記念 碑	地震があったら津浪の用心せ よ、津浪が来たら高い所へ逃 げよ、危険地帯に居住する な；大槌町流失・倒壊 6 2 2 戸、溺死61人、耕地浸水 6 7 町歩	s 9 , 5 月
110	大槌5	大槌町安渡大 槌川左岸	【ｽｷﾞ 寺院 碑 10m 小・神社30m	s35	津浪災害記 念碑	地震があったら津浪の用心せ よ、地震がなくとも異常引き 潮は津浪と思え、津浪があっ たら高い所へ逃げよ；チリ津 浪突如 4 Mの波高数回、被害 総額 9 億円余、異常引き潮の 発見により避難、死者なし	s 3 5 , 1 2 月
111	大槌6	大槌町		m29	過ぎにし明 治二十九年 六月十五日 の夜半に…		m 4 2 , 6 月

112	大槌7	大槌町史跡御社地		s8	昭和八年三月三日大海嘯記念碑	地震があつたら津浪の用心せよ、津浪が来たら高い所へ逃げよ、危険地帯に居住をするな；大槌町流失・倒壊622戸、溺死61人、耕地浸水67町歩他	s 9, 3 月
113	釜石1	釜石市片岸町片岸室浜、県道脇		S8	津波記念碑	大地震の後には津波が来る	s 1 0, 3, 3
114	釜石2	釜石市片岸町片岸室浜、県道脇	[ｽｷﾞ 民家3～30m	m29	海嘯記念碑		
115	釜石3	釜石市片岸町片岸稻荷神社	[ｽｷﾞ 神社22m	S8	津波記念碑	大地震の後には津波が来る	s 1 0, 3, 3
116	釜石4	釜石市片岸町片岸稻荷神社	[ｽｷﾞ 神社22m	m29	南無妙法蓮華經八大竜王鎮座	天長地久国土安穩、海上安全村内繁栄	m29
117	釜石5	釜石市鶴住居町新田常楽寺	[ｽｷﾞ 寺20m 碑一基20m 一基30m	m29	吊祭碑	津波による無縁仏の慰霊、13回忌	m 4 1, 6, 1 5
118	釜石6	釜石市箱崎町箱崎、県道脇	[ｽｷﾞ 碑30m 民家3～30m	m29	忠烈永芳、英霊台記	箱崎小学校教員栃内泰吉御眞影を波間に救い死す、大海嘯殉難者慰霊	s 3, 6, 1 5
119	釜石7	釜石市箱崎町箱崎、県道脇		S8	津波記念碑	大地震の後には津波が来る	s 1 0, 3, 3
120	釜石8	釜石市箱崎町箱崎、個人宅	[ｽｷﾞ 民家3～30m 碑30m		津波海嘯映死無縁者追善供養塔	…蓮華化生	s 5 1, 6, 2 7
121	釜石9	釜石市箱崎町大板宿海岸近傍山腹	[ｽｷﾞ 民家ほとんどナシ	m29	海嘯横死精霊	施主、番頭、大謀、親方名他84名	m 3 0, 5, 5
122	釜石10	釜石市箱崎町大板宿海岸近傍山腹	[ｽｷﾞ 民家ほとんどナシ	m29	海嘯溺死小林勝蔵精霊		
123	釜石11	釜石市箱崎町大板宿海岸近傍山腹	[ｽｷﾞ 民家ほとんどナシ	m29	海嘯横死無縁塔	夏館建綱（漁船乗り組み遭難者供養）	
124	釜石12	釜石市両石町両石、国道脇	[ｽｷﾞ 民家10～30m 神社30m	m29	両石海嘯記念碑	両石村790人のうち、204人生き残るのみ、この恨み減すべからず、漢詩あり	m 3 5, 7

125	釜石13	釜石市両石町 両石、国道脇		m29	海嘯記念碑		
126	釜石14	釜石市両石町 両石、国道脇		s8	津波記念碑	大地震の後には津波が来る	s 1 0 , 3 , 3
127	釜石15	釜石市大只越 町1丁目、石 応禪寺	[スギ* 碑20~30m 小25m	m29	三陸大海嘯 溺死者弔祭之 碑	田中製鉄所職員工夫103名 の慰霊	s 3 0 , 3
128	釜石16	釜石市大只越 町1丁目、石 応禪寺		m29	海嘯記念碑	釜石町841戸2979人溺 死	m 3 5 , 6
129	釜石17	釜石市大只越 町1丁目、石 応禪寺		m29	海嘯炎死追 悼		
130	釜石18	釜石市大只越 町1丁目、石 応禪寺		m29	海嘯万人供 養塔		
131	釜石19	釜石市大只越 町1丁目、石 応禪寺		m29	海嘯惨死者 追吊記念銅 像之記	溺死者甚大合葬、7回忌	m 3 5 , 7 , 7
132	釜石20	釜石市大只越 町1丁目、石 応禪寺		m29	欠損	釜石19と対をなす、一部欠 損	m 3 5 , 7 , 7
133	釜石21	釜石市港町1 丁目、須賀神 社		m29		三陸津波による神社流亡、旧 蹟発見により神社再興	t 1 5
134	釜石22	釜石市松原1 丁目、共同墓 地	[スギ* 碑20~30m 神社30m	m29	嘯没者追弔 塔	松原住民海嘯炎死者59人、 3回忌	m 3 1 , 5 , 5
135	釜石23	釜石市端石町 1丁目、旧国 道下		m29	海嘯横没精 霊	端石水害炎死者155人、3 回忌	m 3 1 , 5 , 5
136	釜石24	釜石市平田町 下平田、館山 神社	[スギ* 神社40m 民家3~40m 小 10m	m29・ s8	海嘯記念碑	m35年建立の記念碑(下平 田35人炎死)風化につき、 再建	s 3 2、 移転再建 s 4 7
137	釜石25	釜石市平田町 尾崎白浜、共 同墓地	[スギ* 碑30m・70m 神社30m 小40m	m29	海嘯横没者 供養塔	白浜339人横死、	m 3 0 , 7 , 1 5
138	釜石26	釜石市平田町 尾崎白浜、共 同墓地		m29	三陸大津波 犠牲先祖供 養塔	尾崎白浜部落は375人を喪 い、生存者20人のみ、海難 遭難者の供養とも	s 4 7、 改修s 5 0、改修 平成2
139	釜石27	釜石市平田町 尾崎白浜、共 同墓地			大津波犠牲 先祖霊位		s 4 0

140	釜石28	釜石市平田町 尾崎白浜、共同墓地		個人	中村重兵衛 閔歴	45才にて津波で一家全員失 い、一人残る、後家を再興 し、s44年117才にて死 去	s44
141	釜石29	釜石市平田町 佐須、防潮堤 近傍	[ｽｷﾞ 神社20m 民家3～40m	m29	海嘯記念碑	17回忌	m45
142	釜石30	釜石市平田町 佐須、防潮堤 近傍	[ｽｷﾞ 神社20m 民家3～40m	m29	佐須浜海嘯 記	11戸97人部落のうち、83人 死す、27回忌	1922
143	釜石31	釜石市平田町 佐須、防潮堤 近傍		m29	海嘯罹災者 之墓	佐須浜漁船乗り組み死亡者2 0名の供養碑	m30、 6
144	釜石32	釜石市唐丹町 花路辺、県道 脇		m29	追哀碑	唐丹村花路辺部落流失戸3 8、死者202人、33回忌	s3、 5、5
145	釜石33	釜石市唐丹町 本郷、県道 脇	[ｽｷﾞ 唐丹本郷 遡上＝12.7～ 20.3。	m29	海嘯遭難記 念之碑	本郷部落300戸、800人 死亡、33回忌	s3
146	釜石34	釜石市唐丹町 本郷、県道脇		S8	津波記念碑	大津波くぐりてめけぬ雄心も ていさ追ひ進み参る上らまし	s9、 3、3
147	釜石35	釜石市唐丹町 大曾根、県道 脇		m29	海嘯遭難者 納骨之所	33回忌	s3
148	釜石36	釜石市唐丹町 小白浜、盛巖 寺	[ｽｷﾞ 神社20m 民家3～40m	S8	津波記念碑	大津波くぐりてめけぬ雄心も ていさ追ひ進み参る上らまし	s9、 3、3
149	釜石37	釜石市唐丹町 小白浜、盛巖 寺		m29	海嘯溺死霊 供養碑、有 縁無縁合葬		m29、5
150	釜石38	釜石市唐丹町 小白浜、盛巖 寺		m29	海嘯記念碑		
151	釜石39	釜石市唐丹町 片岸、天照御 祖神社	[ｽｷﾞ 神社30m 碑30m 小5m	m29	海嘯溺死碑		
168	大船渡 1	大船渡市赤崎 町合足、県道 脇	[ｽｷﾞ 神社・民家 10～30m	S8	津波記念碑	溺死者20名、被害個数11 戸、地震があったら津波の用 心	s10、 3
169	大船渡 2	大船渡市赤崎 町合足、県道 脇	[ｽｷﾞ 神社・民家 10～30m	m29	海嘯横死者 諸精霊塔	80名死亡	
170	大船渡 3	大船渡市赤崎 町外口、貴船	[ｽｷﾞ 神社・民家 30m以上	m29	丙申海嘯死 亡者諸精霊	死亡19名、	
171	大船渡 4	大船渡市赤崎 町外口、貴船	[ｽｷﾞ 神社ミｽｷﾞ	m29		死者14名の戒名・俗名	
172	大船渡 5	大船渡市赤崎 町蛸ノ浦、県 道脇	[ｽｷﾞ 小30m民家 2～20m	S8	津波記念碑	昭和8年両蛸浦部落溺死者32 名、被害戸数33戸、地震が あったら津波の用心津波が来 たら高い所へ	
173	大船渡 6	大船渡市赤崎 町蛸ノ浦、県 道脇	[ｽｷﾞ 小30m民家 2～20m	m29	丙申大海嘯 横死諸群霊 墓		m45、 5
174	大船渡 7	大船渡市赤崎 町清水、県道 脇	[ｽｷﾞ 民家3～ 20m	m29・ s8	津波記念碑	明治29年清水部落溺死者35 名、被害戸数16戸、昭和8年 清水部落溺死者16名、被害戸 数25戸	s10、 3

175	大船渡 8	大船渡市赤崎 町永浜	〔ｽｷﾞ〕 神社30m 民家 2 ～20m	m29	丙申海嘯横 死長浜七拾 四名供養塔	戒名、馬頭観世音菩薩拾二 頭、	m 3 3 , 旧 8 , 2 8
176	大船渡 9	大船渡市赤崎 町永浜	〔ｽｷﾞ〕 神社30m 民家 2 ～20m	S8	津波記念碑	昭和8年両永浜部落溺死者1 0名、被害戸数40戸、地震 があったら津波の用心津波が 来たら高い所へ	s 1 0 , 3
177	大船渡 10	大船渡市赤崎 町跡浜、奥道 脇	〔ｽｷﾞ〕 神社30m 民家3～10m	m29・ s8	津波記念碑	明治29年赤崎村溺死者45 7名、被害戸数228戸、昭 和8年溺死者81名、被害戸 数212戸、地震があったら 津波の用心、津波が来たら高 い所へ	s 1 0 , 3
178	大船渡 11	大船渡市猪川 町長谷堂	〔ｽｷﾞ〕 民家10 ～30m 小20m 寺院30m	m29	万人霊塔	為海嘯死没者建之	m29, 9
179	大船渡 12	大船渡市盛町 町、浄願寺	〔ｽｷﾞ〕 寺 神社 小 20～40m	m29	海嘯記念	戒名5名	m29, 旧 5, 5
180	大船渡 13	大船渡市盛町 町、洞雲寺	〔ｽｷﾞ〕 寺 神社 小 20～40m	m29	大海嘯記念	気仙郡被害死者6670余人 もっとも甚だし、天恩の忝き によって7回忌のいまに至 る、大日本水難救済会副総裁 鍋島直大篆額、(裏面) 寄付 者名	m 3 5 , 6, 1 5
181	大船渡 14	大船渡市盛 町、下館下	〔ｽｷﾞ〕 寺 神社 小 20～40m	s35	チリ地震津 波襲来地点		
182	大船渡 15	大船渡市大船 渡町富沢、西 光寺		m29	海嘯死者	村内120余名、無縁70余 名	m 3 0 , 旧 8 , 5
183	大船渡 16	大船渡市大船 渡町富沢、西 光寺	〔ｽｷﾞ〕 20m高台	S8	津波記念碑	想起せ昭和8年3月3日、大 地震の後には津波に注意せ よ、三四十年に一度は津波が 来るものと思へ、急に潮が引 いたら警鐘ならせ、警鐘聞い たら高い所に	s 9 , 3, 3
184	大船渡 17	大船渡市大船 渡町富沢、西 光寺			津波犠牲者 供養塔		
185	大船渡 18	大船渡市大船 渡町地ノ森		s35	津波犠牲者 の霊に捧げ る	あなた方の死をむだにはいた しません いつ どんな津波 が襲って来ても それに打ち 勝つ十分な備えを持ち、総力 を挙げて私たちの町を守りま す。 悲しい出来事が起こっ た一年前のあの日から 海に 生き 海とともに伸びて行く 私たちの町の新しい建設は真 剣に進められています。どう ぞ安らかに眠ってください。	s 3 6 , 5, 2 4
186	大船渡 19	大船渡市大船 渡町地ノ森	〔ｽｷﾞ〕 川沿いの 10m高台	s35	チリ地震津 波到達地点		
187	大船渡 20	大船渡市大船 渡町野々田	〔ｽｷﾞ〕 港口3～ 10m	s35	チリ地震津 波襲来地点		

188	大船渡 21	大船渡市大船 渡町笹崎		s35	チリ地震津 波到達地点		
189	大船渡 22	大船渡市大船 渡町下大船渡		m29	海嘯溺死者 壘		m35、
190	大船渡 23	大船渡市末崎 町船河原	[ｽｷﾞ 湾内 神社 20m 民家10～ 40m]	m29	明治廿九年 六月海嘯襲 来地点		
191	大船渡 24	大船渡市末崎 町石浜	[ｽｷﾞ 神社70m 民家10～40m]	S8	昭和八年三 月海嘯襲来 地点		
192	大船渡 25	大船渡市末崎 町石浜		m29	明治廿九年 六月海嘯襲 来地点		
193	大船渡 26	大船渡市末崎 町内田		S8	昭和八年三 月海嘯襲来 地点		
194	大船渡 27	大船渡市末崎 町内田	[ｽｷﾞ 民家 2～ 40m]	m29	明治廿九年 六月海嘯襲 来地点		
195	大船渡 28	大船渡市末崎 町細浦	[ｽｷﾞ 民家 3 ～20m]	S8	昭和八年三 月海嘯襲来 地点		
196	大船渡 29	大船渡市末崎 町細浦	[ｽｷﾞ 民家 3 ～20m]	m29	弔魂		m30、 旧5、5
197	大船渡 30	大船渡市末崎 町細浦		m29	明治廿九年 六月海嘯襲 来地点		
198	大船渡 31	大船渡市末崎 町細浦		m29	海嘯溺死之 壘		
199	大船渡 32	大船渡市末崎 町細浦		S8	津浪横死者 供養碑	地震津浪（慶長16年以来の 津浪来襲の歴史を綴る）	s10、 3、3
200	大船渡 33	大船渡市末崎 町中野、	[ｽｷﾞ 民家 3 ～40m]	S8	昭和八年三 月海嘯襲来 地点		
201	大船渡 34	大船渡市末崎 町中野		m29	明治廿九年 六月海嘯襲 来地点		
202	大船渡 35	大船渡市末崎 町小細浦	[ｽｷﾞ 神社25m]	m29	海嘯記念碑	ふき出し そのあらなみの はげしさを おもひ出ても か しこむや けふ（福羽美静 作）、末崎村670余人溺 死、細浦330余人溺死、天 皇初め義捐あり、	m35、 6、15
203	大船渡 36	大船渡市末崎 町山岸		m29	明治廿九年 六月		
204	大船渡 37	大船渡市末崎 町鶴巻		m29	明治廿九年 六月海嘯襲 来地点		
205	大船渡 38	大船渡市末崎 町門之浜	[ｽｷﾞ 小50m 神 社20m・30m]	m29	明治廿九年 六月海嘯襲 来地点		

206	大船渡 39	大船渡市末崎 町門之浜	〔ｽｷ〕 小50m 神 社20m・30m	S8	昭和八年三 月海嘯襲来 地点		
207	大船渡 40	大船渡市末崎 町門之浜	〔ｽｷ〕 小50m 神 社20m・30m	m29	明治二十九 年海嘯襲来 地		
208	大船渡 41	大船渡市末崎 町西館	〔ｽｷ〕 民家20～ 30m	S8	昭和八年三 月海嘯襲来 地点		
209	大船渡 42	大船渡市末崎 町中森 麟祥 寺	〔ｽｷ〕 寺院20m 神社30	m29	海嘯記念碑	泊部落溺死者261名、この 惨状を後に伝えんため磐石碑 を建つ	
210	大船渡 43	大船渡市末崎 町中森 麟祥 寺	〔ｽｷ〕 寺院20m 神社30m	m29	明治丙申海 嘯溺死弔魂 碑	二三回忌	s 3, 6
211	大船渡 44	大船渡市末崎 町中森 麟祥 寺	〔ｽｷ〕 寺院20m 神社30m	S8	津浪横死者 慰霊塔	地震津浪（慶長16年以來の 津浪襲来の歴史を綴る）、い つかまた襲ふ津浪を忘れ 海 辺低きに住む人々 おこた るな またたく襲ふあなみ のあだを思ひて避くる心を	s 10, 3
212	大船渡 45	大船渡市末崎 町泊里	〔ｽｷ〕 民家5～ 20m	S8	昭和八年三 月海嘯襲来 地点		
213	大船渡 46	大船渡市末崎 町三十刈		m29	明治二十九 年海嘯襲来 地		
214	大船渡 47	大船渡市末崎 町大浜	〔ｽｷ〕 民家30～ 40m	S8	昭和八年三 月海嘯襲来 地点		
215	大船渡 48	大船渡市末崎 町大浜	〔ｽｷ〕 民家30～ 40m	m29	明治二十九 年海嘯襲来 地		
216	大船渡 49	大船渡市末崎 町高清水	〔ｽｷ〕 民家10 ～50m	S8	昭和八年三 月海嘯襲来 地点		
217	大船渡 50	大船渡市末崎 町高清水	〔ｽｷ〕 民家10 ～50m	m29	明治二十九 年海嘯襲来 地		